

[音 楽]

日本の伝統音楽に興味をもたせる鑑賞指導の工夫

- 表現活動を取り入れた鑑賞指導 -

今井 隆子*

1 はじめに

平成10年の学習指導要領の改訂により、音楽科では和楽器の学習が必修となった。筆者はそれを機会に、表現の領域では箏の演奏を授業に取り入れるなどしてきた。表現する活動に生徒達は楽しく、興味をもって取り組んだ。しかし、鑑賞においては、我が国の伝統音楽をあつかっても理解が難しいのか、集中して鑑賞することが難しかった。例えば、2学年の鑑賞で歌舞伎「勸進帳」をあつかったときは、あらすじや人物、飛び六法などの見どころを解説してからDVDで鑑賞したが、あまり興味を示さなかった。

どのようにして生徒に日本の伝統音楽に興味をもたせれば良いのかと考えた時に、筆者は箏の演奏を授業で取り入れた後の箏曲「六段の調」の鑑賞指導をした。箏を用いて表現活動をしてから鑑賞した場合は映像をよく見て、音色の変化などもよく聴き取っていたのである。つまり、自分たちが鑑賞の内容に関わる表現の活動を行った場合には集中して鑑賞することができ、しかも音色などをよく聴き取っていたということである。

このことから、表現活動を鑑賞に取り入れることで、生徒の伝統音楽に関するへの興味・関心を高め、よさや特質を感じる生徒を育てたいと考え、本研究主題を設定した。ここで言うよさや特質とは、西洋音楽とは違う日本の伝統音楽特有の要素やテクスチャである。音程や拍が微妙にズレていることや、ずり上げるような音の出し方、声で言えば頭声とは異なるいわゆる地声に近い発声や民謡におけるコブシのような音程の揺れなどである。

2 研究の目的

この実践では特に、3学年時の日本の伝統音楽の鑑賞の授業において、どのような表現活動を取り入れることが、日本の伝統音楽に興味をもち、よさや特質を感じ取ることができる生徒の育成につながるかを検証する。

3 研究の方法と検証方法

(1) 研究の方法

映像や音源での鑑賞とあわせて、表現活動を取り入れた活動を行う。雅楽や能楽の楽器は簡単に用意できるものではない。そこで鑑賞指導の質を高める視点から次の3点で工夫を試みた。

①唱歌や、台詞を読んで声に出すことで興味を深める

雅楽においては箏の旋律を唱歌で、また、狂言では謡の部分を取り上げたり、台詞を読んだりすることを行った。

②身体表現としての膝打ちで興味を深める

楽太鼓や鞆鼓についてはリズムを取り上げ、手でひざを叩いてみることを行った。

③所作を真似る身体表現で興味を深める

平成20年改訂の学習指導要領には「我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。」とある。腰の位置をはじめとした姿勢や身体の使い方は、旋律の特徴や間などの日本の伝統音楽がもつ特質と深い関わりがあるからである。例えば、雅楽の楽太鼓や鞆鼓について言えば、演奏だけでなくその前後の動作や正座での姿勢まで、能楽で言えば腰を落としてゆっくりとした速さで摺り足で歩くことまでもが、楽曲や作品の特徴や雰囲気や形づくっているのである。そういったことから、姿勢や身体の使い方を無視して日本の伝統音楽の理解にはつながらない。この実践では狂言を題材に台詞を読むことや謡を声で表現することだけでなく、

* 柏崎市立北条中学校

冒頭部分の登場人物の姿勢（姿勢やかまえ）、動作（摺り足を含めた足の動き）を行った。

(2) 検証方法

ワークシートや感想用紙に教師が示す項目に従って感想を書かせることにより、生徒の理解や学習の深まりの分析に活用する。

4 実践の構想と概要

3学年を対象とした授業でどのような表現活動を取り入れることができるか考えた結果、「唱歌や、台詞を読んで声に出すことで興味を深める」、「身体表現としての膝打ちで興味を深める」、「所作を真似る身体表現で興味を深める」ことを行うこととした。また、ワークシートや感想用紙の[リズム・拍子（鞆鼓や楽太鼓、拍子）]、[音色や音のつながり]、[曲の構成（繰り返し、楽器の入ってくる順や同時に鳴っている音）]、[動き]、[発声など]などの項目はそれぞれの教材で生徒に感じ取らせたいものを挙げた。

各題材（教材）での表現活動の内容は次のとおりである。

(1) 題材名 「雅楽の特徴を知ろう」 教材：雅楽「越天楽」

- ① 楽太鼓のリズムを叩く（雄撥、雌撥による強弱）。 「膝打ちで興味を深める」
- ② 鞆鼓のリズム（片来、諸来）を叩く。 「膝打ちで興味を深める」
- ③ 箏の旋律を唱歌でなぞる。 「唱歌で声に出すことで興味を深める」

(2) 題材名 「狂言のおもしろさを知ろう」 教材：狂言「附子」

- ① グループ内で役割を決め、台詞を読む。 「台詞を読んで声に出すことで興味を深める」
- ② 主人の台詞を独特の抑揚に気をつけて読む。 「台詞を読んで声に出すことで興味を深める」
- ③ 構え、摺り足などの基本姿勢と動作。 「所作を真似る身体表現で興味を深める」
- ④ 冒頭の主人の動き（名のりまで）。 「台詞を読んで声に出すことで興味を深める」
「所作を真似る身体表現で興味を深める」
- ⑤ 謡の部分を読もう。 「謡の部分を読もう」

5 授業実践

〈授業実践1 雅楽「越天楽」での実践〉

(1) 題材名 「雅楽の特徴を知ろう」 教材：雅楽「越天楽」

(2) 題材の目標

- ① 雅楽に関心をもち、鑑賞することに意欲的である。
[関心・意欲・態度]
- ② 音色、曲の構成などの要素を知覚することができる。
[感受や表現の工夫]
- ③ 要素の働きによって生み出される雰囲気を感じ取ることができる。
[鑑賞の能力]

写真1 鞆鼓のリズムで膝を叩く



(3) 指導計画

	主な学習活動	表現活動
1次 1時間	①楽器の解説の映像を使用し、雅楽に使われている打楽器の名称と音色を確認する。 ②楽太鼓の演奏箇所を取り出し右手、左手で膝を叩いてみることにより、強弱や雄撥、雌撥について知る。 ③鞆鼓のリズムを叩くことにより、片来、諸来の違いや左右どちらの手で演奏するのかを知る。 ④打楽器の演奏に留意して全体を聴く。	「膝打ちで興味を深める」 「膝打ちで興味を深める」
2次 1時間	①楽器の解説の映像を使用し、管楽器と弦楽器の名称と音色を確認する。 ②箏の楽譜（箏の唱歌と楽太鼓を打つ箇所が表記されているもの）を使用し、唱歌でうたうことにより、旋律の切れ目や音程の変化を感じ取る。 ③五線譜のスコア（箏の旋律の部分に筆者が唱歌を書き加えたもの）を使用し、箏の旋律をたよりに他の楽器がどのタイミングで演奏しているのか確認する。 ④越天楽を「平調音取」の部分から聴き、曲全体を味わう。	「唱歌で声に出すことで興味を深める」

楽太鼓と鞆鼓のリズムで膝を叩いてみることは前にも述べたとおり、楽器を用意することが難しいからということが理由のひとつであるが、矢沢（2010）は「(手拍子を打つことは)民謡に対する抵抗感を取り除くために、導入として取り入れた。(中略)音楽を苦手と感じている生徒でも容易に活動できる利点があると考えたからである。実際に、生徒はこの活動を通して唄の拍や速さを体感することができたため(以下略)」と述べている。生徒に普段なじみのない音楽にふれさせる際、この手法は簡単にでき、速さを理解させることのできる有効な方法であると考えた。

(4) 生徒の様子（生徒Aの感想） [] の中はワークシートの項目

[リズム・拍子（鞆鼓や楽太鼓、拍子）]

- ・ゆっくりだった。はいるところがきまっていたと思う。
- ・鞆鼓が指揮のかわり。加速している。

[音色や音のつながり]

- ・音がのほほんとしてて、出だしとかははっきりしない、あいまいなところが日本の曲らしい気がした。日本人のはっきり言わない感じと重なる部分があった。
- ・竜笛の音色が美しく聞こえた。「パーン」とまっすぐな音ではなく「ふぁ〜」とあまり安定していない音だった。のばしているところのうしろの音程がよく変わった。

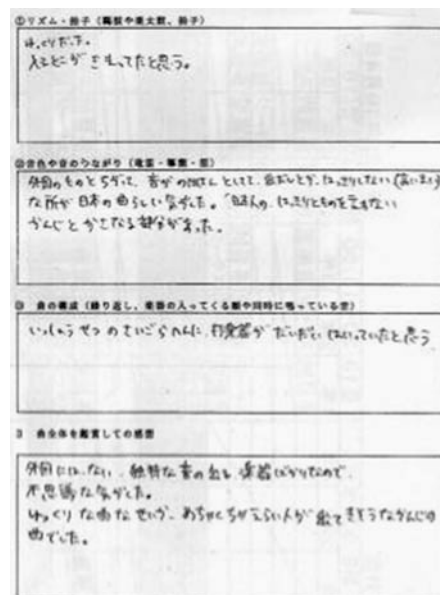
[曲の構成（繰り返し、楽器の入ってくる順や同時に鳴っている音）]

- ・1小節の最後あたりに打楽器がだいたい入っていたと思う。
- ・フレーズごとに楽太鼓が入っていた。竜笛と箏は同じところに入っている。

[全体を鑑賞しての感想]

- ・外国にはない独特な音の出る楽器ばかりなので、不思議な気がした。ゆっくりな曲のせいか、めちゃくちゃえらい人が出てきそうな感じの曲でした。
- ・箏と琵琶の音が月を表しているようでした。鞆鼓が雨を表している感じだった。加速していて、歌舞伎の時の水音みたいだったから。平安時代のように優雅な感じ。個人的に好きな曲。

資料1 ワークシート 生徒A



(5) 考察

唱歌は2年時に箏で「さくら」を演奏した時に少しふれた事があるが、実際にやってみたのは初めてである。はじめは配られた唱歌の楽譜を見て「わからない。」と言った生徒も練習するうちに楽しそうに歌っていた。しかし、途中、五線譜のスコアを使用してからは、現在スコアのどこを聞いているのかわからなくなる生徒がいた。これは唱歌の時間を充分とることができなかつたためであるが、五線譜を使用したことも原因のひとつである。これにはスコアに小節番号を書き込ませることで対応した。また、各種類の楽器の演奏箇所を聞き取る事に時間がかかった。これは何人かで聞き取る楽器を分担するなどの必要があった。ワークシートの記入を見ると、音色については聞き取っているが、リズムや構成に関してはよくわからなかつたようだ。感想の欄に「外国の曲にない、独特な不思議な音だった。」「大きい音で聞いたら不快だと思う。」などの記入があり生徒にはなじみのない音楽であることがうかがえる。様々な音楽に親しませることが必要だと考える。

使用する楽譜については、日本の伝統音楽をあつかう場合できるだけ本来その楽曲で使用されているものだけを使うべきであったと考える。五線譜を読むことが苦手な生徒にも親しみやすく、また、日本の伝統音楽の音の出し方や音色を表しているのはそういった古来から使用されてきた楽譜だからである。

〈授業実践2 狂言「附子」での実践〉

(1) 題材名 「狂言のおもしろさを知ろう」 教材：狂言「附子」

(2) 題材の目標

- ①狂言に関心をもち、鑑賞することに意欲的である。〔関心・意欲・態度〕
- ②声の音色，言葉の抑揚，身体の使い方などを知覚することができる。〔感受や表現の工夫〕
- ③雰囲気を感じ取り，おもしろさを味わうことができる。〔鑑賞の能力〕

(3) 指導計画

	主な学習活動	表現活動
1次 1時間	①グループ内で役割を決め，台詞を読むことによりあらすじをつかむ。 ②冒頭の主人の台詞を読むことにより，台詞は独特の抑揚で話されていることを知る。 ③主人の台詞の抑揚を確認しながら，映像で冒頭部分を鑑賞する。	「台詞を読んで声に出すことで興味を深める」
2次 1時間	①構え，摺り足などの基本姿勢と動作を体験することにより，身体の使い方を知る。 ②冒頭の主人の動きを台詞を交えて体験することにより，動く速さや台詞と動きの関係を知る。 ③謡の部分で謡うことにより歌詞の意味や音程を知る。 ④曲全体を鑑賞し，おもしろさを味わう。	「所作を真似る身体表現で興味を深める」 「謡の部分で声に出すことで興味を深める」

矢沢（2010）は「こぶしを模倣する実践が民謡への関心を高める効果が大いに期待できる。」と述べている。この実践において、狂言の台詞の独特な抑揚や謡、姿勢（姿勢や構え）、動作（摺り足を含めた足の動き）を生徒に理解させるために、教師（筆者）を模倣させることから始めた。筆者は2007年から定期的に狂言師に指導を受けている。伝統音楽を学んでいく過程で、模倣や口伝は日本古来からの伝統的な手法である。そうして受け継がれてきたのだということを生徒に学ばせることも重要であると考えた。

(4) 生徒の様子（生徒の感想） [] の中は感想用紙の項目
[動き]

- ・簡単に見えるが、実際にやってみると規則があつて難しい。食べるころは本当に食べているみたいだった。（生徒S）
- ・中腰と摺り足と手の形を崩さず動いていたのはすごいと思いました。自分で実際にやってみたらつらかったので。扇であおいでいるときの動きが一番おもしろかったです。（生徒AK）

[発声など]

- ・腹から声を出してるなあと思った。また、イントネーションのつけ方などがお経と似ていると思った。（生徒S）
- ・常にゆれながら発声していた。のばすところはのばして、最後の部分をすっきりするような感じでやっていた。（生徒AN）
- ・地声でよくあんな高いこえがでるなと思いました。（生徒AI）

[全体の感想]

- ・台詞だけでは話の内容がわからなかったが動きがつくとわかった。（生徒S）
- ・太郎冠者と次郎冠者のかけ合いがおもしろかったです。扇だけであこまで表現するのはすごいなと思いました。（生徒AI）
- ・すごかった。泣く演技とかけっこうおもしろいところがあったから楽しく見れた。（生徒AO）

(5) 考察

生徒の感想から、姿勢や動きの特徴、声の出し方、台詞の抑揚を感じ取った上で、それらを鑑賞の観点として映像を見ることができたことがわかる。また、実際に動いてみるにより、姿勢や動きの大変さを実感したり、役割を決めて台詞を読んだことにより、ストーリーを理解して鑑賞することができたと考える。感想の「ゆれながら発声していた。のばすところはのばして（以下略）」という箇所から、発声の特徴を理解させる為に実際に声に出してみたことの有効性がうかがえる。狂言の謡は能に比べて短いものも多く、能楽の導入に適していると考えられる。これを窓口として能の鑑賞につなげたい。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

①唱歌や、台詞を読んで声に出すことで興味を深める

雅楽の実践においては筆楽の旋律を唱歌でなぞることにより、竜笛などの他の楽器の音色や音の出し方にも留意して聞き取ったことがワークシートから読み取れる。また、狂言の実践では謡を体験してみることで音程の揺れや地声で高い音まで出しているということを感じ取っている。また、台詞を読むことによって話の内容や登場人物の役柄を理解し楽しみながら鑑賞することができた。

写真2 狂言「附子」の台詞を読む



写真3 狂言の構え、摺り足



資料2 感想用紙（生徒AN）

曲名	附子	演奏形態・演奏者など
作曲者		
国名・時代		
《研究メモ・感想》		
①動き すべてすり足でやっていた。曲がる所では、必ず止ってから動いていた。自分も実際にやってみて少し足を曲げるのをずっとやっているとつらかった。		
②発声 常に声がゆれながら発声していた。のばす所はのばして最後の部分をすっきりお経の感じでやっていた。		
③感想 歩いている時は足を曲げてすり足でつねに歩いているのが大変だと思った。セリフが長いのにすべて暗記しているのがすごいなと思った。		

②身体表現としての膝打ちで興味を深める

身体表現としての膝打ちをすることによって、鞆鼓を打つ速さを実感したり、打楽器がそれ以外の楽器とどのようなタイミングで鳴っているのか、音と音の関わりに気づくことができた。

③所作を真似る身体表現で興味を深める

摺り足や中腰で動くことを体験したり、扇の使い方を知ることにより登場人物の動きに注目して鑑賞することができた。扇だけでいろいろな表現をすることができることや、摺り足や中腰のままゆっくり移動したり素早く附子から遠ざかったり、謡に合わせて舞う様子を鑑賞し、「すごかった。」「おもしろかった。」「楽しく見られた。」の何らかの言葉を学級の全員が感想用紙に書いており、楽しみながらよさを感じ取ることができたことがわかる。

今回の実践においては、多くの生徒が楽しそうに表現活動に取り組むことができた。ワークシートや感想用紙には、音色やテンポ、音の出し方、音程の揺れ、旋律、演じる姿勢などについて自分なりに特徴を感じ取り、記述することができた。これは日本の伝統音楽のよさや特質を感じ取ることができたと考えられる。これらのことから今回の実践の方法は目標達成のために有効であった。

(2) 研究の課題

今回の実践の生徒の感想などから、さらに多様な音楽に親しませる必要性を感じた。「他の日本の伝統音楽への広がり」という視点で挙げてみると、能や文楽などへ、また、柏崎に伝わる「綾子舞」や北条地区の「神楽」など地域に伝わる伝統芸能へつなげて行くことが考えられる。そのために教材開発や指導の準備として教師が取り組む課題を挙げる。

①教師が学ぶ機会の充実

雅楽の実践の考察で述べたが、できるだけ本来その楽曲で使用されている楽譜を使うべきである。しかし、その入手は非常に困難ものが多く、また読むことが難しい。現在、箏や和太鼓などの講習会は見られるようになったが、能楽や文楽となるとまだまだ直接ふれる機会が少ないように感じる。指導者である教師が積極的に講習会に参加するなどして学ぶ必要がある。

②講師の確保

日本の伝統音楽を教材としてあつかう事が難しいと感じている教師が未だに多いのではないだろうか。能や文楽であれ、地域の伝統芸能であれ、それらを受け継ぎ現在に伝えている方々に直接に教えを請うことができれば教師も生徒も一層、興味や関心をもって親しむことができるのではないか。その為には、そういう方々とのつながりが必要であり、講師として学校へ招くことのできるシステムが必要である。

③地域の伝統芸能の教材化

現在勤務している北条地区には神社で奉納される神楽が伝承されている。今回の実践で取り上げたのは「雅楽」や「能楽」であった。筆者はそれらだけでなく、地域の伝統芸能を授業に取り入れることができないかと考えている。歴史や楽曲そのものを調べる作業を、社会や総合的な学習の時間で行うことによって音楽の授業で充分楽曲に親しむ時間が確保され、自分たちの暮らす地域や人そのものにも興味・関心をもつ生徒が増えるのではないか。神楽を小学生の頃にやっていた生徒もおり、教材としてとりあげる事によって地域の伝統芸能に目を向けさせ、日本の伝統音楽に親しませたい。

〈引用文献〉

中学校指導要領解説 音楽編 文部科学省 平成20年9月25日 初版発行
矢沢 剛 「地域民謡」を歌唱教材とした、我が国の伝統的な歌唱指導の充実 上越教育大学学校教育実践研究センター 教育実践研究第20集 p139-144 2010年3月 発行

〈参考文献〉

小林 責 (監修)・油谷光雄 (編者) 狂言ハンドブック第3版 三省堂 2000年11月 改訂版第1刷発行
野村萬斎 (監修)・小野幸恵 (著) 日本の伝統芸能はおもしろい③ 野村萬斎の狂言 岩崎書店 2002年3月